

生活科教育にかかわる現状と課題

部長 保科 徳久

1 生活科教育の動向

阿賀町立三川小学校では、県小学校教育研究会の研究調査指定3年次として、「やる気と自信をはぐくむ生活科・総合的な学習の時間の創造」という研究主題のもと、以下の点に重点をかけた先進的な研究に取り組んでいる。

- ・ 互いのよさを認め高め合う学び合いの場を設定する。
- ・ 活動意欲を引き出す肯定的な評価の工夫を図る。
- ・ 活動内容に応じてペア、グループ、全体など多様な学習形態を組み入れる。

各地区では、新指導要領の本格実施を見据え、市町村単位やブロック単位で生活科の年間指導計画の改善に着手している。

新しい年間指導計画改善の視点を以下のようにして作成している市がある。

- ・ 児童の気づきを質的に高めるような、見付ける、比べる、たとえるなど多様な活動を配置する。
- ・ 活動や体験したことを言葉や絵で表す表現活動を重視する。
- ・ 自然の不思議さや面白さを実感するよう、身の回りの自然に接したり、利用したりする活動を取り入れ、中学年の理科を視野に入れた単元を開発する。
- ・ 幼児教育から小学校への円滑な接続の視点も取り入れた他教科等との合科的、関連的な指導の一層の充実を図る。

2 生活科教育の課題

日々の授業では、児童の気づきを大切にしている。しかし、児童のどのような動作やつぶやきが表れれば児童が気付いたことになるかという具体的な規準が明確になっていないのが現状である。明確にするためには、評価規準の「気づき」の項目をより具体的に子どもの姿に設定することと、それに近づけるための活動を入れた単元構成が必要となる。また、理科的な学習要素を視野にいれて、自然の不思議さやおもしろさを実感できるような指導計画等の改善も図っていく必要がある。

小1プロブレムなど、学校生活への適用を図ることが難しい児童が学年全般に増えてきている。入学当初においては、生活科が中心的な役割を担い、単元を工夫するなど合科的・関連的な指導の充実を一層図る必要がある。また、その理念を総合的な学習の時間を中核にして中学年に広げていくことも大切である。